

以上、著者熟年の四十年間の活動を総体的に見るとき、その学術的探求心の老いてますます盛んなことに驚嘆させられる。毎年のように国内外の各種学会に出席されて、ほとんどの学会に時には英語で研究発表をされている。又特別講演等を引き受けられて、その研究心の旺盛なことが、学術的に高いレベルを維持しておられることにただただ敬服する。

全編を読み通して見たとき、前著と同じように、著者が自身の歩みを語るなかで、その当時の社会状況を折り込みながら、臨場感溢れる書き方をしておられるので、同時代に生を受けたものにとつて、実に身近に感じられ、著者の体験が自らの経験のように身につまされ迫るものがある。読後感の誠にすがすがしい、印象深い一書である。鍼灸研究者はもちろん、医学史研究者だけでなく、同時代人にも広く推奨できる好著といえる。

(杉浦 守邦)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、二〇〇五年八月四日、一三三頁、A五版、本体二〇〇〇円〕

栗山茂久・北澤一利 編著

『近代日本の身体感覚』

本書は、編著者を含めて十二名の著者からなる論集とも言うべき著作で、『近代日本の身体感覚』という魅力的なタイ

トルを超える広域なテーマと問題意識が提示されている。全体は「第一部 苦痛の伝統と近代医療」「第二部 身体之美を競う論理」「第三部 視覚が芽生えた近代」「第四部 近代社会の身体化と抵抗」「第五部 こころの重さの伝統」の五部からなっているが、それぞれの部の表題自体が「身体」を標的としながら、そこで語られている身体が多義的であることを示唆している。

第一部は、第一章・鈴木晃仁「戦前期東京における病氣と身体体験」——「滝野川区健康調査（昭和十三年）」を手がかりに、第二章・白杉悦雄「冷え性の発見」、第三章・酒井シヅ「頭痛の誕生と腹痛の変容」の三章からなり、いずれも近代以降の日本人の病の感じ方（疾病感覚）の変容を、鈴木の場合に主として歴史統計学的手法を用い、白杉と酒井は文献による検討を行っている。

第二部は、第四章・眞島亜有「黄色人種」という運命の超克——近代日本エリート層の「肌色」をめぐる人種のジレンマの系譜——、第五章・鈴木則子「女学雑誌」にみる明治期「理想佳人」像をめぐる「第二章からなっており、近代以降に日本の中・上流階級で意識されるようになった「容姿」を特に肌の色と美容の観点から分析している。

第三部は、第六章・尾鍋智子「眼で食べるお弁当」、第七章・山田憲政「動く襖絵」——日本の伝統的空間意識の二章からなる。前者は弁当の「いろいろ論」の変化から、後者は「動く襖絵」を題材としながら近代日本の遠近法把握と静

画の動画化という課題に迫っており、ともに視覚の近代化を取り上げている。

第四部は、第八章・西本郁子「過労死、または過労史について」、第九章・北澤一利「栄養ドリンクと日本人の心」、第一〇章・博沼範久「人間化」から「動物化」へ——舞踏家・土方巽の「肉体の反乱」の三章からなり、労働、栄養、舞踏と肉体という視点から近代化する社会の断面を穿鑿していく。第五部は、第十一章・北中淳子「鬱の病」、第十二章・栗山茂久「ストレスの謎と刺激革命」の二章からなり、近代社会における「こころ」の西洋近代化の問題を俎上にのせている。

本書が転換期日本社会の近代化過程を身体の「感覚」の変化とその前時代的残映を「近代医療」「身体美」「視覚」「身体化」「こころ」の五つの切片から描出した試みは斬新であり、かつ近代日本医史学にとっても大いに示唆に富む。これは主に編者による問題設定のユニークさに負うところが大きい。この編者らが提起した観点は、一見、思想や認識という「上部構造」の変化は、感覚や体験という「下部構造」の変容を抜きにしてはあり得ないことを図らずも実証している。まさに「意識がその存在を規定するのではなく、存在が意識を規定する」かにみえる。しかしながら、本書の個々のモノグラフはそのような陳腐な唯物論的把握を飛越して、それぞれの時代に生きた人々の身体に刻まれた文化と社会をリアルに照射している。そこに本書が歴史的視点に立ちながら、それにとどまらず優れて今日的な問題意識をもって編まれている

ることが示されている。

一方、歴史的検討の成果として本書をみたとき、「近代日本」という時代の射程や論証に用いられている史・資料のオリジナリティなどに個々のモノグラフ間で扱っている方に差異が見られた点もある。また、「感覚」の概念の認識次元においても同様の差異があるように思われる。それを本書の特徴とみるか、今後の課題とみるかは読者に判断を委ねたい。いずれにせよ、必読の書であることは揺るがない。

(瀧澤 利行)

〔書局社、東京都千代田区三崎町三—三—四、電話〇三—三二六五—八五四八、二〇〇四年八月、四六判、四二六頁、本体三〇〇〇円〕

武田科学振興財団杏雨書屋 編

『宋版 備急総効方』

標題の本書全四〇巻が本年三月、武田科学振興財団より一冊本として縮刷影印出版された。また小曾戸洋氏による詳細な書誌解説と本書の引用書名索引、および参考として『証類本草』引用書名索引も後付されている。むろん本書に影印された宋版『備急総効方』の原本は武田科学振興財団杏雨書屋の所蔵である。

杏雨書屋を斯界で知らぬ人はなからうが、所蔵の古医籍